

黒人研究学会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.87 (March 30, 2019)

第87号 2019年3月30日

例会発表要旨

10月例会 2018年10月6日 立命館大学 衣笠キャンパス

① 20世紀初頭南アフリカ文学における戦争・モダニズム的世界観・国家意識

溝口 昭子（東京女子大学）

「モダニズム的状况やその意識」は大英帝国に関連したモダニズム研究の文脈では「植民地近代という、いわば近代国民国家に必要な主権やリベラリズムが欠落した近代を生き延びる植民地主体の状况やその意識」と定義され、植民地主体の国家意識やナショナリズムは必然的に「完全な近代国民国家への希求」を意味する。本発表では19世紀後半のケープ植民地で人種的平等を保証するリベラルな（近代国民国家に近い）制度を経験した南アフリカの白人女性作家オリヴ・シュライナーと（Olive Schreiner）とアフリカ人作家ソル・プラーキー（Sol Plaatje）を取りあげ、20世紀に南アフリカが人種隔離差別を国是とするアパルトヘイト国家への道を進む「モダニスト的状况」に抗して、彼らがそれぞれの立場からその想定する「英国のリベラルな読者」に向けて、ボーア戦争や第一次世界大戦を経て表現した「国家意識」の変容を論じた。

シュライナーは早くから大英帝国の収奪を目的とする侵略戦争やボーア戦争に抗議し、人種的に平等な社会を緩やかに南アに実現する可能性（「アフリカーナー＝弱者」という捏造を孕みつつ）を説いた。一方でプラーキーは、大英帝国を「ケープ植民地の制度を南ア全土に広める存在」として支持し、ボーア戦争には帝国臣民として参戦した。また、戦後の人種差別政策に失望しつつも、第一次世界大戦では英国側として参戦を表明した。それは同じ大戦に抗議した平和主義者シュライナーとは対照的であったが、彼にとって帝国臣民としての戦争参加こそが近代国民国家実現の手段だったのである。その後、両者の「近代国民国家への希求」は汎アフリカニズムの影響を受け、植民地主義を内包する西洋近代そのものへの批判や、暴力に苦しむ非支配者間の平和主義的連帯を含むようになる。

② 日本におけるW・E・B・デュボイス紹介・研究概観

古川 哲史(大谷大学)

本発表は、本年（2018年）に生誕150周年を迎えたW・E・B・デュボイス（William Edward Burghardt Du Bois: 1868-1963）の、日本における紹介や研究を概観する試みであった。現在の日本は依然として第二次世界大戦前・中・後のコロニアルな諸相やねじれを抱えたまま、近年の〈グローバル〉な潮流に曝されている。したがって、日本（あるいは日本の学界）においては、何をもち「日本における〜」とするかは常に意識し、検証し続けなければならない視座／立ち位置の問題となろう。本発表では、主に日本で刊行された関連書籍や論考を取り上げながら、書誌学的な視点から、デュボイスの紹介・研究概観を試みた。配布資料では、日本において日本語に翻訳されたデュボイスの著作を、次にデュボイスに関する主要な書籍、論考などを刊行年順に記した。また、スクリーン上で、デュボイス来日（1936年）も含め、関連写真を何枚か紹介した。

W・E・B・デュボイスの著作の日本語訳は、管見の限り、*Dark Princess: A Romance* (1928) の抄訳であるデュ・ボア（山室静訳）『黒い王女』、『尖端短篇集 附 黒人文学集』（アメリカ尖端文学叢書、新潮社、1930年12月、432-448ページ）を嚆矢とする。以降、1936年12月に「満洲国」経由で来日、2週間滞在したデュボイスに関連する新聞記事などがある。第二次世界大戦中の、日本の敗戦の約1年前には、*The Negro* (1915) の翻訳が、W・E・バーガート・デュボア（井上英三訳）『黒人論』（博文館、1944年9月）として刊行された。デュボイスの代表作 *The Souls of Black Folk* (1903) の日本語の完訳書は、W・E・B・デュボア（木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳）『黒人のたましい』（未来社、1965年12月）である。日本でもアメリカの公民権運動が注目されている時期であった。

日本においては、1920年代には「人種問題」「黒人問題」への関心が高まり、アメリカ黒人（アフリカ系アメリカ人）を取り上げる書物も増える。滝浦文彌『奴隷上りの偉人 新文明の建設者 ブーカー・ワシントン』（単純生活社、1927年）はワシントンの伝記であるが、「解放の三大運動」として、ワシントン以外にデュボイスやマーカス・ガーヴェーについても言及している。第二次大戦後は、1954年の本会（黒人研究会、現・黒人研究学会）創設に見られるよう、アメリカ民主主義への疑問、公民権運動への関心などから、黒人の歴史や文化の研究が本格化する。本発表では、最後に、1950年代から現在までの主要なデュボイス研究を紹介し、文学者、歴史学者、社会学者などによって蓄積されてきた成果に触れ、デュボイス研究のさらなる必要性、現代的意義について述べた。

③ *Under the Volcano*におけるポストコロニアリズムの諸相

風早 悟史(山口東京理科大学)

Malcolm Lowry の小説 *Under the Volcano* (1947) は全12章で構成されており、章が移ると視点人物も変わる。第1章を除き、残りの11章で描かれているのは、1938年11月の死者の日、酒におぼれている英国領事 Geoffrey Firmin と彼を取り巻く人々の一日である。本発表では、そのうち、Hugh Firmin を視点人物とする第8章を主な考察の対象とした。

Hugh は 30 歳前後のイギリス人であり、Geoffrey の異母弟にあたる。記者の仕事で、メキシコのクアウナワクという町に住む Geoffrey のもとを訪れている。第 8 章で Hugh はいくつかの重要な体験をする。本発表では、その中からとくに、彼と Geoffrey が “pleado” と呼ぶ男との出会いに着目した。pelado とは、文字通りには皮を剥がれた状態を意味するスペイン語であり、メキシコ都市部の浮浪者の通称でもあるが、*Under the Volcano* では、スペイン人がインディオを pelado と呼んで蔑しみ、また反対に、インディオもスペイン人を蔑むためにそれを使うことが紹介される。Hugh と Geoffrey がトマリンの闘技場へ向かう途中で出会った謎めいた男を pelado と呼ぶのは、彼がどうやらスペイン人であり、スペイン内戦に関係するファシストであるらしいと見当をつけるからである。

本発表では、Chinua Achebe や Ngũgĩ wa Thiong’o、V. S. Naipaul をはじめとしたポストコロニアル文学において、英語テキストの中に挿入された未翻訳の「現地語」が果たす役割を指摘した Bill Ashcroft の議論なども援用しつつ、Hugh と男の関係性が、上記のような pelado という言葉の多義性と流動性を再現していることを論じ、*Under the Volcano* をポストコロニアリズムの観点から読み直す可能性を探った。

1 月例会 2019 年 1 月 26 日 青山学院大学 青山キャンパス

① Gayl Jones の *The Healing* におけるアフリカ系アメリカ人作家にとっての人種と愛の語り

平沼 公子(名古屋短期大学)

Gayl Jones は、その作品で暴力をも含む男女間の親密な関係を描き、過度に性的な表現を用いることから、しばし「(彼女の作品には)セックスという主題しか描かれていない」と批判されてきた。このような Jones 作品の異質さは、彼女の作品に関する批評の少なさへとつながり、結果的に作家と作品を論じづらいものとしてきた。

本発表では、はじめに Jones 作品の論じづらさを考察することにより、その論じづらさ自体が、アフリカ系アメリカ文学において重要でありつつも避けられてきた、愛や親密さを語る行為と関係していることを明らかにした。その上で、第 2 作 *Eva’s Man* (1976) において暴力や愛憎として立ち現れる男女関係が、22 年後に発表された *The Healing* (1998) において再びアフリカ系アメリカ人が置かれている歴史的・社会的な文脈と結び付けられている点を指摘し、その語り直しを分析した。*The Healing* において、愛や親密さは、それらが否応なしに孕む歴史性によって妨げられることとなるのである。しかしながら、本作品はこの歴史的・社会的に規定されたアフリカ系アメリカ人の「愛の形」から、彼女たち／彼らがいかに解放され得るかという問いを投げかけている。Jones の語りの形式は、主人公 Harlan の恋愛体験が歴史的な文脈に回収されそうになる度に、Harlan 自身が愛や親密さを個人のものとして取り戻せるように機能している。最終的に本発表では、本作品において Jones が、アフリカ系アメリカ人が、愛や親密さが孕む歴史性から自身を解放することの可能性を、Faith Healing という超自然的な癒しと回復

の作業と、それと対比される普通の女の語りという形式によって提示していると結論づけた。

② 『デュー・ブレイカー』におけるトラウマの物語

山本 直子(龍谷大学)

エドウィージ・ダンティカの短編集『デュー・ブレイカー』(2004)は9つの物語で構成されているが、全ての作品がデュヴァリエ独裁政権下のハイチとつながりを持つ人々の話であり、この短編集を一つの大きな物語として読むことも可能である。発表では、『デュー・ブレイカー』において、恐怖政治を体験したハイチの人々が過去のトラウマと向き合い、それを乗り越えようとする様がどのように描かれているのか分析した。中絶、身内の死、暴政による抑圧などを体験し、人には言えない悩みや苦しみを抱えながら、登場人物はそれぞれ自分の過去と対峙し、トラウマを乗り越えようと奮闘する。アメリカで移民として生きるハイチ出身の人々は、しばしば孤立した状況に追い込まれるが、トラウマの問題を一人で解決することはできない。同じ苦しみを抱える他者に共感と理解を示しながら他者と連帯することで、人はトラウマの過去を乗り越えることができる。筆舌に尽くし難い悲しみや恐怖は、悪夢やフラッシュバックというトラウマ記憶となって人に憑りつく。トラウマ記憶から逃れるためには、それを物語記憶に変換して誰かに語らなければならない。『デュー・ブレイカー』には様々な語り手が登場し、過去の体験を語ることでトラウマを乗り越えようとする。物語のなかで語り手と聞き手は一体化し、同じ歴史的記憶を共有する人々が一つの共同体を形成している。ダンティカは、沈黙を余儀なくさせられてきた人々がそれぞれの視点から見た真実を描写することで、作品のなかでデュヴァリエ独裁政権下のハイチの全貌を映し出している。

③ ジェイディーンと時代

——「村落文学」、*Tar Baby* (1981) と幻の映画脚本、そしてポスト・ソウル

西本 あづさ(青山学院大学)

『タール・ベイビー』(*Tar Baby*, 1981)は、しばしばトニ・モリスン(Toni Morrison, 1931-)の文学の周縁に位置する作品とみなされてきた。しかしそれは、モリスンが職業作家としての再出発点で同時代と向き合い、自らの作家としての位置づけや探求すべき文学的テーマを見定めようとした過程が生々しく投影されているという意味で、きわめて重要なテキストである。

本発表では、ポスト公民権運動時代のアフリカ系アメリカ文学・文化の形成にモリスン文学が果たした役割を分析する研究の一端として、『タール・ベイビー』で扱われる民族文化の継承の問題を、中心人物の一人ジェイディーン・チャイルズに焦点を当てて考察した。まず、初期批評においてジェイディーンに向けられた否定的な評価に、作家と同時代の批評家が共有した民族文化を取り巻く急激な変化への危機感を読み取り、モリスンがばらばらになりそうな民族とその文化をつなぎとめるため構想した「村落文学」について検討した。次に、同小説の草稿とモリスンとトニ・ケイド・バンバーラ(Toni

Gade Bambara, 1939–1995) が手掛けた未発表映画脚本のエンディングの分析から、1980年代初めという時代がジェイディーンに想定し期待した黒人女性像を探った。最後に、80年代末から声を上げ始めるポスト・ソウル世代とジェイディーンとの呼応関係を指摘し、彼女の物語を当事者として語り出す新しい声の出現を確認した。そして、『タール・ベイビー』が、古い物語に新たな意味を吹き込みつつ更新する語りの声を誘い出す「村落文学」の役割を実践していたと結論づけた。

会員からの投稿

ウォーレ・ショインカ氏の講演会レポート

佐竹 純子（プール学院短期大学）

1. はじめに

2018年10月20日、ナイジェリアの作家ウォーレ・ショインカ氏の講演会が京都精華大学で開催された。日本初のアフリカ出身の学長が就任した大学に、アフリカ出身初のノーベル文学賞受賞作家が来訪しての講演ということで、大きな期待感をもって参加した。

掲げられたタイトル・テーマは「グローバル化された世界における『表現』の未来」であったが、実際の講演会は「表現」の未来を追究する方向には進まなかった。その理由は後述するとして、当日の流れは以下の通りであった。まずウサビ・サコ学長の挨拶の後、ショインカ氏による基調講演 ‘Temple and Template: Education into Human Rights’ があり、休憩をはさんで、ショインカ氏とサコ氏との対談が行なわれた。ショインカ氏の英語でのお話には逐次通訳が付き、サコ氏は一貫して日本語で話された。

講演内容の報告はすでにある。2018年11月16日の朝日新聞（朝刊）が、朝日教育会議のイベントとして基調講演と対談の内容紹介を掲載している（19面）。また京都精華大学50周年事業のホームページにイベントレポートが公開されている。以下ではできるだけ重複を避けて、私が感じたこと、考えたことを報告したい。

2. Temple and Template: Education into Human Rights というタイトル

ショインカ（以下、適宜敬称略とする）には彼独特の語法がある。日常的話題でも政治的議論でも、評論でも講演でも、彼は芸術的で抽象的な言葉で語る。そして彼の戯曲、詩、小説は、自らの固有の文化から出発しても、行き先は普遍性であるという印象がある。この日の講演、‘Temple and Template: Education into Human Rights’ は、いかにもショインカらしいタイトルである。

言うまでもなく、temple は神殿、殿堂を意味する。ショインカは講演の結論部分で、‘temple of learning’ という言い方をした。一方、template は、次のステップに導くための素地、土台となるものを意味する。語源的には temple と共通し、頭韻も影響して、二つの語は印象的に響き合う。

ショインカの講演は、世界人権宣言と教育についての論に始まる。Universal Declaration of Human Rights の universal は、ショインカの普遍性への希求と重なる。彼は、アフリカ大陸その他の地域で、教育が普遍的な権利となっていない政治状況があると語り、教育の重要性を説く。そこから話題は日本の箸との出会いへと移る。箸に対するショインカの「好奇心」は、驚きと敬意をもって世界の三大食作法の探究へと進んだという。これまでに、箸に関心を示した西洋人は数多くいただろう。しかしショインカの「好奇心」には、植民地主義的「好奇心」が他者の文化を未開と見て、支配し、征服しようというのとは正反対の視点がある。

箸を例に語られたが、他者の文化との出会いに際して、知的に対応できる「素地」や「土台」、すなわち template を培うことこそ教育において重要であるというのが講演前半の論点である。

つづいてショインカは、境界線を引くことが好奇心を知的探究へと方向づけるのを妨げると警告する。自然科学と人文科学の境界も越えられる、ロケット打ち上げに興味があると彼は言う。自身の無重力体験に言及して、同じ体験をしたスティーブン・ホーキングの以下のような言葉を引用する。「パラリンピック大会は、私たちの世界をどう認識するかをも変えてくれる。私たちはみな違っているが、同じ人間としての精神を持っている。私たちには創造する能力がある」。まさに学問領域の境界を越えて template を共有した者の明快な言葉であった。

最後にショインカは temple の語を用いる。探究することにタブーも制限もない。学びの「殿堂」の柱となるのは、好奇心、探究心、そして創造し変える能力だ。これが講演の結論である。

3. 「表現」の未来へ—講演会がそうは進まなかった理由

さてここで、講演と対談をふくめてこのイベントが「表現」の未来を追究する方向には進まなかった理由について考えたい。

第一に、現実的、直接的な理由として、タイトル・テーマに沿う内容の講演会にしようという努力を忘れた、会の運営のまずさがある。対談のコーディネーターである元新聞記者が、文学よりも時事問題という自身の関心を優先させて、それに時間を費やしてしまった。会場で質問用紙が配られ、回収数は多かったように見受けられたが、それらがほとんど活用されずに終わった。対談者のサコ氏は建築分野の研究者であり、京都精華大学の学部構成を考えても「表現」は重要なテーマであったから、残念なことである。

第二の理由として、ショインカの文学作品が日本であまり読まれていないことが関係していると思われる。

ショインカの文章は難しいとよく言われる。たとえば、グギ・ワ・ジオンゴの文章は直球のように心に入ってくる。チヌア・アチェベの文章だと、心を揺さぶられつつ、その世界に引き込まれる。しかし、ショインカ作品ではそうならない。言葉遣いの難しさもあるが、人種、「性」、階級といった出来合いの批評理論の視点で読もうとする読者は、共感しがたい曖昧さを感じて、作品世界に入っていけない。

女性の表現を例にすると、ショインカが表現する女性像は、極端なステレオタイプか、影の薄い存在のように私は感じてしまう。ベシー・ヘッドやミリアム・トラディ、マリアマ・パーやブチ・エメチエタのような女性作家の描く女性像とは比ぶべくもないとして、グギやアチェベ、あるいはセンベヌ・ウスマンのような男性作家が描く女性たちと比べても、私には共感しにくい。

『世界の黒人文学—アフリカ・カリブ・アメリカ』（加藤恒彦、北島義信、山本伸編著、鷹書房弓プレス、2000年）において、小林信次郎がショインカ研究への助言として、次のように述べている。

ショインカ文学はヨルバ人の習俗や神話、ナイジェリアの内戦、軍事政権の弾圧とそれへの抗議や反対運動、モザンビークや南アフリカの解放運動にかかわるものが多い。作品そのものを読むことも大切だが、神話、歴史、社会情勢などに不案内では十分読めない。幸い、*Myth, Literature and the African World* は邦訳もあり、*Ake: The Years of Childhood* はショインカとして平易な英語で書かれているから、それから着手するのが便利だろう。

実は私自身、ハイネマン社のアフリカ作家シリーズ中のショインカ作品が難しく、上記の邦訳と幼少期の回想録から読んで、他の評論や戯曲に進み、再び小説や詩を読み直したものである。最近ではYouTubeでショインカの講演やインタビュー、あるいは演劇まで見ることができる。しかし邦訳書は、私が知る限り、『神話・文学・アフリカ世界』（松田忠徳訳、彩流社、1992年）のみである。ノーベル文学賞作家として、これほど邦訳書が少ない作家は珍しいのではないか。同じアフリカ出身のノーベル文学賞作家であるナディン・ゴディマやJ・M・クツェーの場合、代表作のほとんどが翻訳されている。あるいは同郷のエイモス・チュツオーラの小説も多くが訳され、うち2冊は岩波文庫として刊行されている。大きな違いである。

おそらく京都精華大学での講演会参加者で、ショインカの文学作品の読者や、演劇を鑑賞したことのある者は少なかつただろう。そういう意味でもあの講演会で彼の文学表現を掘り下げることが難しかったのかもしれない。そうではあるとしても、参加者の中には黒人研究学会の会員もアフリカ文学研究者もいたのだから、「表現」の未来についてもう少し踏み込んだ話があってもよかった。

最後に第三の、説明しにくい理由について述べてみる。まず、私の頭を去らない問いがある。二人の対談が、どこまでかみ合う議論となつたのだろうか、という問いである。マリ共和国出身のサコ氏は、中国留学を経て来日し、京都大学建築学専攻博士課程を修了した後、2001年に京都精華大学の教員となった。彼が同大学長に就任した2018年4月に、Afro-Asian Studies Initiativeの第1回会議で私はサコ氏の基調講演を聞いた。サコ氏が他の研究者の発表に対して適確な助言をし、参加者と広く積極的に言葉を交わしている姿に感銘を受けた。9月にはタンザニアで行なわれたAfrica-Asia, A New Axis of Knowledgeの第2回会議においてもサコ氏の基調講演があつたという。いま注目を集める国際的なアフリカ・アジア研究において、彼は大きな役割を担っているのである。

その一方で、サコ氏が京都の過疎地研究に関わり、「地域には、そこに住む人たちのアイデアがたくさんあります。私はその秘書になってアイデアをまとめ、地域のコミュニケーションを促進して行けたらいいなと思っています」と語る。このような姿勢に彼の人間性が表れているのを私は感じる。

サコ氏の研究姿勢は、国際的な場から地域活動に至るまで、現場優先的で実践的であり、語る言葉は日常の生活感覚に根ざしている。ショインカ氏は、まず普遍、抽象をめざして出発するので、その表現はどうしても高踏的になる。もちろん、ショインカが表現者として生きてきた歴史、背負っている場には、生々しい日常が飛び交っているに違いない。しかし彼は、それをそのままに表現することはせず、その昇華に心を砕く作家である。つまり二人は、現実社会に対する姿勢、コミュニケーション言語の選択、めざす表現のスタイルには、大きな距離がある。二人のあいだに架橋するのは、かなりの思慮と技量を必要とする。いつの日か、架橋して対話が成立したら、二人が交わす「表現」の未来についての話を私は是非とも聞いてみたい。

4. ショインカのビデオ『未来への教室』

ショインカ作品は難しいと言いながらも、実は私を魅了してやまないショインカがいる。その姿を伝えるのが、『未来への教室5 ウォーレ・ショインカ』（NHKビデオ、2001年）である。（ただし、民族呼称がヨルバ「族」と訳されているのは問題。）

ビデオは「アフリカに未来がある」および「子どもたちと神話劇を作る」の二部から成る。ショインカは出身校で特別授業を行なう。生徒たちは十代前半、キリスト教徒が多いが、イスラム教徒も何人かいる。みな自らの固有の文化については、あまり知らな

い。ショインカはヨルバの世界観について、対話や課題を通して教える。一神教を基本とする信仰の中で育った生徒たちにとって、ヨルバの世界観との出会いは新しい経験である。

一人の女子生徒が「先生の宗教はなんですか」と質問する。ショインカは即答しない。生徒たちが学びをかさねてから、彼は「どんな神も信じない」と返答する。そして根源的なもの、人間性を信じると続ける。

生徒たちはショインカの演出により「オバタラの投獄」という神話劇を演じる。ショインカは、ヨルバの神々が登場する演劇を通して、民族や宗教の対立から和解へと導く知恵を学んでほしいと生徒たちに伝える。彼が教えるのはアフリカの知性、世界からも敬意をもって受け入れられる知性である。何が自分を滅ぼすか、どうすれば共に生きることができるかを知る知性、その基盤は足元に、ヨルバの神話にある。こうしてショインカは生徒たちにアフリカ的価値を教える。ここにこそ、「グローバル化された世界における『表現』の未来」の種があるのではないだろうか。

報告

会員による出版

神本秀爾・岡本圭史編著、『ラウンド・アバウト——フィールドワークという交差点』、集広舎、2019年1月、248pp.

入 会 者

氏名：五十嵐 舞（いがらし まい）

所属：一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

自己紹介文：フェミニズム研究、クィア理論研究及び、Toni Morrisonをはじめとする文学研究を行っております。現代アメリカ社会におけるジェンダー・セクシュアリティ・人種・身体などに関する秩序と、それに対する抵抗の運動に関心があります。博士論文では、9/11 以前と以降のフェミニズム・クィアの政治におけるセクシュアリティと人種などが交差する場の運動と理論について研究しています。皆さまから色々ご教授賜れますと幸いです。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

氏名：小林 亜由美（こばやし あゆみ）

所属：京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻

自己紹介文：京都大学大学院で、アメリカ文学を専攻しております。イギリス白人 Nancy Cunard（客船会社 Cunard Line の創立家の令嬢）が、アフリカ系アメリカ人のピアニストとの交流から編纂を進めたアンソロジー *Negro*（1934 年出版）について研究を始めたことから、黒人文学・文化に関心を持ちました。現在は、このアンソロジーを中心に、ハーレム・ルネッサンスの文学研究を進めております。よろしく願い申し上げます。

（順不同）

編集後記

今回も無事、会報を発行することができた。いつものことながら、会員の先生方のお力添えのおかげである。さて「無事」と書いたのは、実際に作成中にはいつも以上に頭を悩ませたからだ。前回、前々回と「会員からの投稿」の欄で連続して「留学報告」を掲載してしまったため、今回どのような記事にするかという問題に直面した。こういった時こそ、いかに世の中の出来事にアンテナを張り巡らせているかが問われることを改めて痛感した。もっと広い視野と関心を持って世の中を観察しなければ、と反省しきりである。

そこで今号では、10月に京都精華大学で開催されたウォーレ・シヨインカ氏の講演会についての報告を掲載しようと思い立ったわけである。公演の報告は、京都精華大学のホームページや朝日新聞にも掲載されている。だが会場にいた私としてはそれらの報告では物足りなさを感じたこともあり、佐竹純子先生に大変お忙しい中無理をいって執筆していただいた。先生の報告は、講演ではほとんど触れられることになかったシヨインカの作品にも言及されおり、他の報告にはない視座を与えてくれるものとなっている。当日は写真撮影が禁止されていたため、ここで会場の様子を提供することが叶わなかったのは残念である。

例会の発表も文学では、アフリカ、カリブ、イギリス、アメリカと多岐にわたった。また、知識人研究についても発表が行われ、より立体的に黒人研究に触れることができた半期であった。今後も様々な分野からの発表が楽しみである。

編集作業については慣れてきたが、それでもまだまだ力不足の身で今後も精進して会報の発展に尽くしたいと考えている。会員の皆様の積極的な投稿、ご助言、お力添えを是非ともお願いしたい。

(猪熊 慶祐)

＜編集＞ 黒人研究学会・編集部
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学文学部・坂下史子研究室気付

＜編集者＞ 猪熊 慶祐
gr0313sp(a)ed.ritsume.ac.jp
ホーム・ページアドレス
<https://kmmtshuji.wixsite.com/jbsa>